

朱舜水と安東省庵

その思想上の影響の一端

朱舜水は万暦二十八年（西暦一六〇〇年）十月十二日、浙江省余姚に生れた。名は之瑜、字は魯嶼と言ひ、父朱正（字は存之、号は定寰）の三男として生れた。伯兄に之琦（字は蒼署）、仲兄に之瑾（字は仲琳）がいる。朱舜水の若い頃は明朝の衰亡期で、金の太宗が国号を清を改め、年号を崇徳と改めた時（一六三七）は三十七歳であった。三十九歳で恩貢生として礼部に推薦され、四十四歳の時に監紀同知の官に任ぜられたが、舜水は応じなかった。以後四回の任命にも拒否の態度をとったため、隆武元年（一六四五年、清の順治二年に当る）正月、再び詔を下して召したが任に就かなかった。四月には江西の提刑按察司副使兼兵部職方司郎中、監鎮東伯方国安軍をも拝さなかったため、

疋 田 啓 佑

閣部の動鎮科道は文書でもって論劾して「偃蹇（傲慢で威張っていて）にして朝を奉らず、人臣の礼なし」と言われたため、舜水は「星夜、海浜に遁逃[※]す」とあるように、海浜つまり舟山に逃げ、そこから長崎へ行くことになり、この年に舟山から日本（長崎）へ至った。それ以来、順治十六年（一六五九・日本の万治二年）までの十四年間に、中国（舟山や安南）から七回長崎に来ており、またその間、亡命政権の福王から九回、官吏の任命があったが、すべて拒否している。そしてこの七回目の来航で日本に帰化することになった。時に朱舜水は六十歳であった。

一方、安東省庵は朱舜水より二十二歳若く、元和八年（一六二三年・清の天啓二年に当る）、柳川で生れた。名

は守約、字は魯默、号は省庵、または恥斎という。父は柳川藩士安東親清。寛永十四年、島原の乱に出陣し、次の年江戸へ赴き、これより学問に志した。江戸や長崎を往来して学ぶほか、慶安二年（一六四九）、京都の松永尺五に師事した。松永尺五は藤原惺窩に学んだ朱子学者であり、省庵も学問は朱子学から始まっている。時に省庵二十八歳。五年後の承応三年（一六五四）、長崎で陳明徳、戴曼公（名は笠、のち僧となって独立と称した）に会い、朱舜水のことを聞いた。省庵は舜水の学識が高いことを聞き、何とかして師事したいと考え、会うことを願って手紙を書き、陳明徳に托した。省庵の熱意ある手紙を受けとった舜水は、来教を読み、踴躍健羨す。元定は真に吾が老友にして、而るに乃謙るに自牧を以てし、退きて弟子の列に就かんとす。然れども敢て辞せざるはまた故あり。学術の明らかならざる、師道の廃壊もまたすでに久し。世に、仁・義・礼・楽を以て宗と為すを聞かず、況んや其の言、行はれて身これを化せんとするをや。……不肖の性行質直にして、一も長ずる所なし。ただ此れ人と善を為すの誠、飢渴に迫り、十四年倦倦として望むこと切にして、今一旦意の外これに遇ふ、それ敢て進脩の志を阻まんや？（「安東守約に答ふるの書三十首」（一）『朱舜水書』巻七、書簡四、中華書局刊）

と喜んで、省庵の学問に志す熱意を汲んで彼に答えるために、来年の夏、日本に来る時には、経書を携えて来て、省庵の下に往復してお互に学問を啓発しあおうと続けて手紙に書いている。

省庵は陳明徳（医師、のち帰化して日本名頼川入徳という）の手を通して朱舜水からの手紙を受けとり、感銘にたえなかったことを述べるが、二人の間の手紙の往復は、船の出入港の関係で思うようにならなかったため、手紙を受けとった時の喜びはひとしおである。その気持を書いた省庵の手紙には次のようにある。

往冬、鴻文を恵まるゝを辱けなくし、銘感に勝へず！即ち擬へて拝謝す。而れども長崎の友人これを留めしため、帰期甚だ迫ると謂ふも、勢相及ばず。景仰の余、ただ荒穢（自分の手紙）並びに拙稿を奉り、區區（私）の誠、自ら門下に進めんことを期す。志は教へを求むるに在りて、忌憚の慮なきを忘る。……（中略）……

今春伏して答書及び鴻文（舜水の手紙及び文章）二篇を承く。手を盥ひ香を焼き、捧誦して已めず、誘掖すること諄諄として、一言も教に非ざるなし。謹んでこれに家に藏し、以て世々宝と為さん。……来教に曰く、夏に及びて重ねて敝邑に来たると。平生の願、千里と雖も猶は將に笈を負はんとす。況んや親炙するをや？伏して冀

はくは、門下の列に在るを許せよ、幸、これより大なるは莫からん！（「朱先生に上る二十二首」）（『省庵遺集』卷六）

とあり、また朱舜水を自分にとっては程子兄弟や朱熹であると次のように述べている。

守約昏愚と雖も、志無き者に非ず。不幸にして未だ君子の大道を聞かず。汲汲乎として先生長者の教えを求むること、猶ほ衣食に飢寒するがごとし。先生の来るは、豈に平生の願に非ずや！設し程・朱の日本に來りて、これに師事せざること有らば、寧ぞこれを識見有る者と謂はんや？今先生の来るは、即ち程・朱の來たるなり。守約幸にその業を儒とす。往きて見ざるは、彼の曲芸小枝の人に如かず、師を尋ねて千里を遠しとせず、將にこれ道に志すと謂はんとす！（同前書（五））

このようにして二人は遂に万治二年（一六五九年）に会うことができた。時に省庵三十八歳、舜水六十歳のことであった。

省庵は、舜水を師として仕えることになったが、舜水には生活の手だてがないために窮乏状態にあった。省庵は師の窮乏を見過ごせず、自分の俸禄を割いて師にさし出したという話は、省庵と朱舜水の間の美しい師弟愛の話として『先哲叢談』『近世叢語』等、沢山の本に描かれている。

この事情は、省庵の書簡の中にも、師を納得させるため書いたものがあるが、舜水が孫の毓仁（舜水の長男大成の長子）に与えた手紙にあるのを掲げる。

安東省庵苦苦として懇留し、転展して人に央す。故に駐留して此に在り、是れ特に我一人の為に此の厲禁を開くなり。既に留まりし後、乃ち半俸を分ちて我に供給す。省庵の薄俸貳百石、実米八十石なり。其の半を去らば四十石のみ。毎年兩次崎に到りて我を省す。一次の費銀五十両、二次共百両なり。苜蓿（うまごやし、貧窮）先生の俸、此に尽く。また土儀（土産物）時物、絡繹として（つぎからつぎへと）人を差しつかはして送り来る。其の自ら奉ずるは、敝衣・糲飯・菜羹のみ。或る時豊腆なれば、則ち魚鰯数枚のみ。家はただ一唐鍋のみにして、時を経て烹調することなく、塵、鉄鏽を封ず。其の宗親朋友、咸共（みな）に非りてこれを笑ふ。諫めてこれを沮む。省庵恬然として顧みず、惟だ日夜読書して道を楽しむのみ。

（「孫男毓仁に与ふる書」『朱舜水集』卷四）

舜水はこの手紙に省庵の貧しく、御馳走の時でさえいわず数匹、従って鍋は煮物することなく塵がさびを覆う有様なのを親戚の人や友人が忠告しても平然として学問に精進する姿を孫に書き送り、このような人は中国には滅多に居ない、だから「汝、名義を知らざれば、また当に心に銘じ、

骨に刻んで、世世忘れざるべし」と続けて述べている。

(二)

上に述べたような二人の間柄であたので、省庵が何らかの形で朱舜水から影響を受けたと考えられるものを検討してみたい。

先ず学問について見てみる。省庵は松永尺五から朱子学を学んでおり、明暦二年（一六五六）には『性理大全』から「治道篇」を抄出して立花忠茂公に献じている。この書は朱子及びその先学の北宋の周濂溪以下、所謂朱子学としてまとめられる一群の学者の文章を部類立てして集めたものである。また朱舜水に会った万治二年に校訂して刊行した『学蔀通弁』は、明の朱子学者陳清瀾の著で、陸王学を排斥したものである。従って省庵は純粋な朱子学者と言える立場であったが、当時中江藤樹から熊沢蕃山へと受け継がれて広まりはじめた陸王学について、省庵は舜水に問うている。これに対して舜水は、

(1) 孔子は生知の聖なるも、其の一生は並びに（決して）生知を言はず、言ふ所の者は学知のみ。「古を好み、敏にして求む」（『論語』述而）「学びて厭はず」（同述而）「丘の学を好むに如かず」（同公治長）等の語に謂ふが如く、聖人の人を教ふるの法を見るべし。陸象山、王陽

明の非なること、自然見るべし。中国と貴国とを論ぜず、皆当にこれを以て法と為すべからず」（「安東守約に与ふるの書二十五首」〔19〕『朱舜水集』巻七）

(2) 陸象山・王文成の学の若きに至りては、事煩にして褚（手紙）短、尽すこと得べからず、面に当りし時、詳悉せん。（「安東守約に答ふるの書三十首」〔1〕同前書巻七）

(3) （省庵）問ふ、朱・陸の同異、説明を弁ずるを待たず。近世の程篁燾の『道一編』・席元山の『鳴冤録』、其の誣ふるや甚し。然れども尊徳性・道問学、陸説また親切に似たり、奈何？

（舜水）答ふ、尊徳性・道問学、病と為すに為らず。便ち必ずしも其の同異を論ぜず。生知・学知・安行・利行、究竟に到れば、総べてこれ一般。朱を是とする者は陸を非とし、陸を是とする者は朱を非とす。玄黄水火、その戦ひ息まざる所以なり。譬へば人の長崎に在りしが京に往くに、或は陸よりし、或は水よりす。陸よりする者は須らく一步一歩走り去くべし。水程よりする者一たび順風を得ば、迅速に到るべし。陸よりする者は計程達すべし。舟よりするものは風を得ざれば累日坐を守らん。ただ京に到るを以て期と為さば、豈に水よりするを非とし、陸よりするを非とすと曰ふを得んや？然れども陸は自ら朱に及ぶ能はず、徳性・問学上の異なるに在るに非ざる

なり。「安東守約の問に答ふる三十四条」(8)同前書卷十一)

(4)問ふ、陽明の学、異端に近きも、近世多く宗主と為すは如何?

答ふ、王文成にもまた病処有り、然れども好き処極めて多し。良知を講じ、書院を創り、天下翕然として道学の名有り。高視闊歩し、優孟の衣冠のごときは、是れ其の病なり。出て江西を撫し、早に寧王の必ず反するを知る。彼の時、宸濠の勢、天を燄薰し、満朝皆其の党羽にして、文成独り能く兵部尚書王瓊と事に先んじて綱繆す。一たび発すれば即ちこれを擒ふ。其の横水・桶岡・瀨頭を勦するの方略、安岑に与ふるの書の折衝樽俎もまた英雄なり。其の徒の王龍溪に語類有り。今の和尚と一般なり。其の書、時に仏書の語を雜ふ。当時斥けて異端と為す所以なり。(同前書(19))

と四つの答えを提出している。(1)で朱舜水是、孔子の如き人こそ生知の聖人であるのに、その孔子でさえ学知、つまり学んで知る努力をしているという『論語』の用例を挙げて証し、それに対し、陸象山や王陽明は心を重視して心即理の立場をとる、つまり王陽明の主張する良知説は、万人がすべて良知を持つと考えるのであるから、学知の立場をとる舜水にしてみれば非と考えるわけで、中国であろうと

日本であろうと陸王の考えを法と為すべきでないことは当然というのである。しかし(2)では、陸・王学を手紙などで説けるように簡単なものでないとして、面談の上説明しようという。さて(3)になると、具体的に、「尊徳性」と「道問学」についての質問になる。ここでは、最後の目的が同じであれば、その間の方法が異なってもかまわないということの旅に於て徒歩と船の譬えで述べるが、その最後で、朱子が陸象山に勝ると言い、それは尊徳性と道問学の問題ではないと述べる。(4)で陽明学は異端とされながら、この立場をとる者が多いことについて、舜水は王陽明の良知を講じ、書院を創設するような、優れた点は認めるのであるが、「高視闊歩するような、また優孟が衣冠をつけたような外面に対して内が異なる」点を欠点とするのである。また陽明の軍事的才能も高く評価するのであるが、陽明門下の、例えば王龍溪のような禅とまざらわしいようなものの混じている所が異端として排斥されるのだという。朱舜水は省庵にこのように答えたが、それを省庵は受けとり、自分の思想の中に咀嚼していったのであろう。

省庵の朱・陸に対する考え方はどうかというところ、

(1)朱陸の弁の事

問て曰、朱陸の弁はいかが心得候べきや。

答て曰、無用の弁にて候。今日の急と云は学を勉めて心

をみがき、義利の弁をよくして少も不義のはたらきをせぬやうにし給ふべし。

又問て曰、學術の関わる所弁せずしては従ふ所正しからず、無用の弁との給ふはいかに、

荅て曰、朱子は学を本とし、陸子は心を本とす。いつれに従ひても道理にそむかぬ心得あるべし。まづ学のたぬは道理にくらき程に、朱子に従ひて象山・陽明をとる事なかれ。『初学問答』(上)

(2) 王陽明の事

問て曰、王陽明はいかん。

荅て曰、陽明知行合一と見たてけるゆへに孟子の良知良能をさりて良知を致すの説を唱へて一家を立たるもの也。孔子は仁との給ひ、孟子は義との給ひ、仁義をかねて教へ給ふ。此教に何のたらざる所ありて彼教に従ふべきや。格物の説もよからず、陽儒陰仏のそしりもげにさる事ぞかし。されど陽明は發明する所多し。取捨を明にすべし。

(同前書)

朱陸の弁に見られるように、學問に於ては、朱子も陸子も關係なく、心を磨き義と利の區別をわきまえ、道理にそむかぬことが肝要なのであり、朱子と陸子との相違は、朱子学が学ぶ、別言すれば格物窮理を根本に置くのに対し、陸子が心を根本に置くという違いがあるが、究めるものは

同じく理想的人格の完成にある。その意味からして、初心者は朱子学の方法から入っていくのが良いとする。つまり陸王学の考えは、初心者にとってはともすると誤解しかねないからである。次の文では王陽明の良知説が、孟子の良知良能説を出ていないと解している。従って何故このような説を出す必要があるかと述べるが、ここに省庵の良知説に対する皮相な解釈を知るとともに、陽明学理解に不足が感じられる。格物に対しては、朱子と陽明では解釈を大いに異にするが、省庵は朱子の物に至るという、即ち學問を物の本質を究めるといふ朱子学の方法を是とする立場と、陽明学の仏教(禪)臭に対する批判をも併せ持っているが、要は朱子学をとるにしろ、要明学をとるにしろ、その際取捨選択こそが重要であると考えているのである。そのように朱舜水と同じ様に省庵も陸王学の良い点は認めるといふ柔軟さを見せている。

寛文八年(一六六九)に成立した『初学心法』(刊行は七年後の延宝三年)は、宋・元・明の性理学者の文章から、立志・存養・省察・克己・慎言等の八項目と雑論の九つに分類したもので、三十九篇の文章を収めているが、そのうち最も多く採られているのが朱子の八条、二番目が薛敬軒の六条、そして三番目に王陽明の五条が来ている。そのあとに羅整庵・陸象山・楊龜山・真西山・李延平らが二条で

他は単出である。朱子学の立場をとる省庵を考えると、王陽明の多さが特に目立つ上陸象山まであることは、省庵の思想的柔軟さが見てとれよう。なおこの中で薛敬軒が多いのは、省庵が特に好んだ学者であり、その著である『読書録』をよく読んでいて、『訓蒙要語』の中に一番多く引かれているのである。また薛敬軒の生き方が、省庵に共感を与えたのであろうか、『理学要抄』の中の「薛文清」の項目に、「薛文清公は毎夜いねてより、一日行ひし事を思ひめぐらして、理に叶ひたる時は心安くいねられしなり。理に叶はざる時は、いねずして其過ちを改ん事を思ひ、又始はつとめて終に怠らん事を慮ると云り。たれくも如此心をみが、ば聖賢にも至るべきなり。」と述べ、薛瑄の生き方を勧めるのである。なお省庵は薛文清については『訓蒙集』の中にも言及があつて特別の思い入れがあるので、朱子に次いで多いのである。

次に国のために命を捧げ、忠義を尽すという面について見てみる。このことについては、朱舜水が何故、舟山や安南のような不便な所を逃げさまよいながらも抗清^{※2}の態度を持ち続けていることや、宋の忠臣文天祥に言及したところなどに見えている。

(1) 文文山（名、天祥）鞠躬尽瘁し、死して後已む。不肖（朱舜水）もまた亟かに其の忠を称す。天下万世の其の

朱舜水と安東省庵

忠を称するに至りしは、其の節に死するに安詳なるに由ると雖も、また「正氣の歌」、「伶仃洋」の諸詩及び告墓の文に由るのみ。（「安東守約に答ふるの書三十書」）（1）『朱舜水集』巻七）

(2) 文文山先生の如きは、不佞の学、以てこれを方とするに足らず、而ども志節未だ敢て少しく遜らず。但だ歴履更に難く、勞悴更に甚しくして、均一に成る無し。（同前（3））

(3) 忠孝の事大なり。不佞の才劣り計庸ふるに、自ら初心を揜れば、実に内疚多し。（同前（27））

(4) 夫れ忠孝之性の若きは、賢契（省庵のこと）これを天植（心）に得、

(5) 此くの如きの昵摯、人子に在りては則ち孝子と為り、人臣に在りては則ち忠臣と為る。何ぞ況んや区区師弟之間をや。（同前書（15））

朱舜水は滅びゆく明朝のために節を全うしようと舟山や安南に落ちのびては復興を計る。それは宋末期、元に攻められ、宋朝を奉じて元に捕えられ死んでいった文天祥と境遇を一にするところがあり、その朝廷に殉ずる生き方を称賛している。この朝廷に対する忠は、人間関係にあっては孝である為、この忠と孝を重視しているのが上に挙げた後半の例である。そして舜水は、省庵の生き方に忠孝の性を

見ている。文天祥のように王朝に殉じて節を全うする者は多い。明末の劉念台もそうであったが、明の成祖（永楽帝）が帝位を篡奪した際、正統の皇位継承に殉じた方孝孺について朱舜水是宋濂と比較して次のように述べる。

（省庵の）問、宋太史、方正学優劣如何。

答、各々其の妙有り。宋濂の博洽、方先生の端肅、皆未だ才を易へざるなり。其の人品は則ち宋は方に如かず、故に其の後、宋は孫の慎に坐して貶死す。（「安東守約の問に答ふる三十四条」〔12〕同前書卷十一）

と言う。宋濂はその人品が方孝孺に及ばないというのは、その節に殉じた方孝孺に共感を持っているからである。その上、宋濂の孫の慎が胡惟庸の獄に連坐したことから宋濂も追放される中で死んだのは、その人品のしからしめることとしている。

このような舜水の考えに対し、省庵はどうかというと、

（1）守約、譏劣鄙薄、比数するに足らずと雖も、聖賢の書を読み、胡難の憂ふべきを知り、未だ嘗て天を禱りて以て中興を願はずんばあらざるなり。……力を勸^{あわ}せ王に勤め、心を悉して恢復し、漢官の威儀、自ら日を計りて見るべし。守約恨むらくは、尺寸以て厚知に報ゆるを效さず、徒だ狗馬の心を懷ふのみ。（「朱先生に上る二十二首」

（2）『朱舜水集』附録三）

（2）守約嘗て文丞相の「我亦東のかた煙霧に随ひて去り、扶桑の影裏、全輪を見る」の詩を読み、慨歎して以為らくもし仮令丞相の日本に來らば、則ちこれが為に鞭を執りて忻慕する所とせんと雖も、然ども惜しむらくは丞相來たらず、また時を同じくするを得ざるなり。（同前書〔4〕）

（3）先生慨然として正学を以て己が任と為す。敬んで想ふに、天の先生をして斯道の統を繼がしめんと。故に節を守りて死せず、將に中興の時に及ばんとす。寧ぞ自愛せざる。守約他に長ずるなし。ただ聖賢の学を好むも未だ至らざる者なり。然れども愚儒の怪しむべく、異端の排すべきを知り、伏して乞ふ、上古の聖賢より明儒の道統に至るまでの図を書して以てこれを賜へ、豈に後生の幸ならざらんや、（同前書〔7〕）

（4）敬んで道統の鴻文を読むに、文理精切、結局は斯道の伝ふる無きを大いに嘆けり。然れども其の数を以てすれば、則ち先生得て辞すべからざる者有り。……先生大明に在りし時、国事を見るに日々非なり。故に崇禎年中徴さるること二次、就かず……飄然として高蹈、胡粟を食はず、誰かこれに間然たらんや。（同前書〔13〕）

省庵は朱舜水の明朝に殉じて抗清の態度で我が国に來航する意味を理解し、宋末の文天祥の文を読み、欣慕しているものの、惜しいことに文天祥は來日しなかったが、その代

りに朱舜水先生が来日されたことを喜んでゐる。それとともに正統の王朝を尊崇することから、延いては学問も正統儒学即ち道統を尊重することを述べている。従って斯道の後世への伝道が、国に対する忠から派生しているのである。省庵はこういう考え方から文天祥の「正気歌」に序文^{※3}（『省庵先生遺集』^{※4}卷三）を書いており、また我が国の忠義の人として平重盛・藤原藤房・楠正成^{※5}の伝記『三忠伝』^{※6}を著わし、『理学抄要』下巻には「楠公を手本とし玉ふべき事」が書かれている。またこの下巻は国を守る為の軍事兵学の事が項目として数多く並び、述べられている。

最後に啓蒙^{※7}について述べる。朱舜水が啓蒙について特に強く主張しているわけではないが、次の文からその点について考えてみたい。

(1) 近著の『訓蒙集』、誠に学ぶ者に益有らん。何ぞ無益の事と謂はんや！ 当に意を留めて速やかにこれを成すべし。（『安東守約に与ふるの書二十五首』）(3) 『朱舜水集』卷七）

(2) 賢契、学を勧むるに陰に競ひ、且晩経史よみ、諸生を奨率して均しく進益有らん、これを聞き極めて喜ぶ。

（『安東守約に答ふるの書三十首』）(12) 同前書）

(3) 貴国の京・江戸に学校を設くるの挙を聞き、甚だ為此これを喜ぶ。貴国は諸事俱に好し。ただこれを欠くのみ。

然れどもこの事これ古今天下国家の第一義にして、如何ぞ以て欠き得べけん。今貴国、聖学興隆の兆有り。是れすなはち貴国興隆の兆なり。古より以来、未だ聖教の興隆すること有らずして、国家の昌明平治する者あらず。

（同前書(14)）

(1) で舜水は『訓蒙集』が学問をする者にとって何ぞ無益の事と言はんと言う言葉遣いの中に、世間の学者が省庵に、このような書はさして役に立たないと言った口吻を感じるのであるが、舜水は早くこの書の完成を促しているのである。次の(2)では朝晩、学問に精進する学生の在ることを喜ぶものであり、その諸生の学ぶ学校を設立させることを喜ぶのが(3)である。そしてこの学校、大きく言えば教育であるが、これが国家を興隆させる基礎となるもので、そこで聖学を教えるということは、日本が興隆していく前兆であるとする。そしてこの学校こそ啓蒙の最良の場である。啓蒙書を書き、学ぶ者に与えて教育していくことがまず根本である。そういう点から考えてか、省庵には啓蒙に関する書物が多い。『訓蒙集』^{※8}『訓蒙要語』『初学問答』『初学須知』『初学心法』『初学故事』『理学抄要』『理学要抄』『啓蒙通解』『幼学類編』等数多くある。こののうち刊行されたのは『幼学類編』（元禄二年刊）『初学心法』（延宝三年刊）である。『訓蒙要語』は道に至る為の階梯として修養

書や教訓書などから百九十六条の文を選び出したもので、省庵の思い入れの深かった薛瑄の『読書録』から六十五条、高濂の『遵生八牋』から五十六条、王達の『筆疇』から二十九条など引いている。

最後にもう一書加えるのは延宝五年の省庵が序を付した『続古文真宝』という書がある。これは元禄四年に京都林氏庄五郎、井上忠兵衛より刊行された上下二巻二冊の本である。江戸時代には『唐宋八大家文読本』『文章軌範』そして『古文真宝』などが、漢文を学ぶ者の必読書とされてきた中に、『続古文真宝』というものを省庵は新たに編んでいる。省庵の序によると、中国には『文選』『唐文粹』『宋文鑑』『明文衡』『文章弁体』『文体明弁』というような、文章の模範となるものが数多く編まれてきたが、それらは初学者にとって難かしく通曉しがたいものであった。そういう中で『古文真宝』は最もすぐれたもので、初めに勸学文があり、また「出師の表」などの名文から「四箴」や「西銘」・「東銘」のような、聖学の道に合致する文で編まれているものの、惜しいことにその収録の仕方が簡に過ぎて遺脱があるように思えるので、省庵は自分の非力をも省りみずに新たに編んだという。真西山のような大学者の編んだ『文章正宗』でさえも欠点が指摘されている。それで省庵は従来のものの欠点を補い、幼学の士のためにと

編集し、最後に「誠実に志し、庶くは至道の階梯と為らんことを」と言って結んでいる。彼の啓蒙に対する意図が十分に汲みとれるのである。

(三)

以上安東省庵が朱舜水に出会うことにより、彼から何らかの影響を受けたであろうと考える三点について述べてきたが、この影響をどう評価するかが問題である。

第一番目に挙げた陽明学に対する許容の態度は省庵の思想に柔軟性を与え、応用範囲の拡大とより多くの人々への適応をもたらした。特に江戸幕府の朱子学をもって唯一の公認の学とする中で、これにあきたらぬ人々に共感を引き起こす面があったが、朱子学一つに沈潜して、思想的に深刻な追求に向わなかったことが、省庵の思想を独自性の乏しいものにしたと言えよう。そういう点で朱子学に於ける山崎闇斎のように、崎門学派のようなものを形成できなかったのである。当時関西の二大巨儒として貝原益軒と並称されていたながら、今日益軒に比べて省庵の影の薄いのはこのような点にもあろうかと考えられる。益軒は省庵に比し、地誌的な面、本草学的（科学的）な面へと独自の世界を築いて名を残した。

次の国に殉じ、君皇に殉じるといふ忠の思想について述

べるなら、この根本にあるのは朱子学の正統主義である。従って朱子も対金政策に於て抗金抗戦の思想を持っていたのを受けて、正統に対して殉じるといふ考えが、我が国に於ては、楠木正成の天皇に対する忠誠としてとり上げられ、それが広く展開して孝の思想にまで及び、それが家の倫理にまで及んできたと言える。その別の表われが思想の上の正統性としての道統主義へつながって展開している。この道統の意味からすれば、朱子学も陸王学もその線上にあるので、仏教のような異端とは、たとい相違があっても同一線上の聖学の教えなのである。

第三の啓蒙についてみると、これは第一の思想の面とながる面もあるが、啓蒙性と教育とは切っても切れない面があるわけで、朱子学にしる陽明学にしる、当時は士族階級の学ぶものであったものを、啓蒙的な教えや書物によって一般の人々に開放した、それが人間の修養に裨益したことを考えると、思想的深まりや独自性を生まなかった反面、一般人士への教育効果をもっと評価すべきではないかと思うのである。そして一般的に舜水の学は実用実学であると言われるように、それを受けた省庵にもこの実用実学の面があり、そうさせるためにあるのが啓蒙性なのである。

このような面だけでなく、省庵の好んだ邵康節の思想に関するものもあるが、それはすでに私の思師山室三良先生

によって説かれているところである。



最後に、省庵が朱舜水に、あの感動的なエピソードでもって仕えるのは何故かと考えるとき、今述べた点などが師から何らかの形でつながったといえ、最も影響があったのは、朱舜水その人の人となり、つまり人格からにじみ出てくる人間性であったのであろう。この人間性こそ中国の儒学の伝統によって培われたものであったろうと思う。そのことを省庵は、「守約毎に人に対して道を談じて曰く、我、朱先生に親炙すること三次。其の人と為り也。一生偽らず、言行動息、自然に道に合す」(「朱先生に上る二十二首」(11))という所に表われており、舜水も省庵の人と為りについて「誠を竭し慎を尽す、人の情の難しとする所」「賢契の不佞の事に於けるや、事事倦切、最も愛を知ると称す」(ともに「安東守約に与ふるの書二十五首」)等と述べ、お互その人となりに共鳴しあうものが、より大きい感動をもたらしたのであろう。

注

※1 舜水の伝記は梁啓超の「朱舜水先生年譜」(『飲水室合集』專集第廿二冊、朱謙之編『朱舜水集』(下)中華書局一九八一年刊、所収)及び今井弘済・安積覚撰「舜水先生行実」等、これらはすべて『朱舜水集』(下)の附録に収められている。

- ※2 抗清の態度をとりながら、明朝の徴辟に対して拒絶したことについて、省庵は疑問に思っ問うている。それに対し朱舜水は、当時、明朝政界の内部紛争を挙げて説明している。
 (「答安東守約問八条」(5)『朱舜水集』卷十問答二)
- ※3 この序文は最後で省庵は「万世忠臣義士の法程也。士君子、豈に一日も学ばざるべけんや」と述べている。
- ※4 享保六年、守経(省庵の孫)序、子守直校、孫守経梓行。
 (九州大学文学部及内閣文庫蔵)
- ※5 朱舜水は長崎の人が楠公父子の画像に賛を書いてほしいと頼まれた時、省庵が楠公の伝記を書いて舜水に呈覧したのがこの『三忠伝』の楠公伝である。
- ※6 天和三年六月序、貞享元年刊。
- ※7 この他に省庵の特色として挙げられるのは郡康節に対しての傾倒である。この点については山室三良先生の「安東省庵——人間・学問・詩心——」及び「同続」(『福岡大学人文論叢』6巻4号、7巻5号)に詳しく述べてある。
- ※8 ここに挙げられている殆んどが、柳川古文書館に所蔵されている。

本稿は一九九五年十月十二日から十五日にかけて行なわれた「中・日舜水学術研究会」(上海市松江県)に於て発表したものに加筆訂正したものである。